

みどりがあざやかな季節になってきました。長引いた花粉症ともしばしのお別れです。現在会員登録数 4,653 人さま。次号は 6 月 20 日発行の予定です／

＋----- ◇◆◇ 目次 ◇◆◇ -----＋

【1】お知らせ

【2】コラム

《1》この本読んだ？

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

《3》子どもの本の珠玉のことば

《4》行って来ました！

《5》宮川健郎 私の出会った児童文学者たち

《6》富安陽子 IICLO ストーリーコンペ 第3回

【3】全国のイベント紹介

【4】プレゼント

＋-----＋

【1】お知らせ

●英語圏児童文学会西日本支部 夏の講演会「文芸翻訳のおもしろさ」

講師：河野万里子さん（翻訳家）

日時：6月27日（土）14：00～16：00

会場：大阪府立中央図書館 多目的室 参加費：600円（会員は無料）

主催：英語圏児童文学会西日本支部（IICLO共催）

※詳細、お申し込みは→ <https://westcl16.peatix.com/>

●「ご寄付をお願いします」当財団の運営を応援いただける個人、法人の皆さまからのご寄付を募っています。寄付金は、当財団が行う講座・講演会など、さまざまな事業経費に充てさせていただきます。

※詳細は → http://www.iiclo.or.jp/donation_10th.html

※Syncable（シンカブル）＝継続寄付（毎年／毎月）、単発寄付が選べます。

→ <https://syncable.biz/associate/19800701>

● YouTube版「本の海大冒険」 <https://www.youtube.com/@iiclol196>

※公開内容一覧は → http://www.iiclo.or.jp/ml_youtube/index.html

● Instagram 随時更新 https://www.instagram.com/iiclo_official/

● X（旧Twitter）毎日更新 https://twitter.com/IICLO_News

【2】コラム

《1》この本読んだ？ Yasuko's & Takeo's Talk

『マユ12歳、鍛冶屋でくらしています。』 福田隆浩/著 あすなろ書房

2026年4月 対象年齢：小学校高学年以上

*今回のゲストは当財団理事の宮川健郎さん（T）です。

*作品の結末まで書いています。

あらすじ：12歳（小6）のマユは学校のグループ発表のとき、つまずき、グループの誰も手伝ってくれずに笑われたような気がしたことをきっかけに、学校に行けなくなる。そこで、鍛冶屋をしている叔父の家に滞在し、時々オンライン授業を受けながら過ごしている。叔父の職人としての誇りを目の当たりにし、叔父の家族に見守られながら、少しずつ心に余裕ができてくる。そんなとき、叔父のテレビ出演の依頼が舞い込んできて叔父が怖気づく様子を見て、自分自身と重ね、学校へ戻って学習発表会に参加することを決める。叔父の仕事をみんなの前で発表することによって、「たぶん、もうだいじょうぶだと思う」と言えるようになる。

T：タイトルに「鍛冶屋でくらしています。」とあるように、鍛冶屋の描写に迫力があって、説得力のある作品だと思って読みました。

Y：職人の様子、かっこいいですね。暮らしに使う道具を作ったり修理したりする野鍛冶で、いわゆる芸術とか伝承とか、リサイクルという言葉ではとりこぼしてしまう、地に足がついた仕事ぶりが伝わります。

T：「あとがき」を読むと著者のお父さんもおじいさんも鍛冶職人だったと書かれていて、なるほど、だから野鍛冶を描きたいという思いが伝わってくる作品なんだと思いました。

Y：野鍛冶の仕事として最初に登場するのは、山芋を掘る道具です。地形に合わせた道具で、ひとつひとつが違うことに意味があります。こういう人に寄り添った丁寧な道具作りが今、必要なのではないかという著者のメッセージだと思います。

T：野鍛冶がマユの成長を描くために使われているのではなくて、マユの成長も野鍛冶の魅力も描かれている作品です。その意味で、これまで書かれた「お仕事小説」とは一線を画しています。一方で、これは読んでいる途中で気がついたのですが、著者の野鍛冶への思いが強いせいか、主人公のマユの一人称視点でありながら、「わたしたちは、早朝から出張仕事に出かけた。」「一輝は以前にも来たことがあるんだ。」のような書きぶりも見えます。12歳は「朝早くから」とか「前にも」というんじゃないかなと思うのですが、こういうところは、背後から著者自身の声が聞こえてくるようです。

Y：なるほど。そのマユですが、物語のはじめで不登校になってしまいます。

T：マユの不登校の理由が、特別な事件ではないところがリアルだと思いました。

Y：自分自身の存在の不安というか、社会の中での自分の立ち位置がわからなくなる様子が伝わります。そして、その回復を大人がみんな待ち続け、マユが自分のペースで大丈夫だと思うという展開は、特別支援学校などで子どもたちを見守り続けてきた著者ならではの描き方だと思いました。

T：マユは、最後に叔父さんに教わりながら刃物を研ぎ、山芋を掘り、包丁を作ります。人の心の回復は、身体と深く結びついているという終わり方にも共感しました。

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

第128回 「復活の前」

若き日の思いを綴る

春が来ます、私の気の毒なかなしいねがいが又もやおこることでしょう、あちちははよ、いちばんの幸福は私であります

このように始まる「復活の前」は、宮沢賢治の盛岡高等農林学校3年次在学中、級友たちと作った文芸同人誌『アザリア』（第5号、1918年2月）に発表されたものです。

冒頭の引用を含む、17の断章（短い文章）を並べたもので、ストーリー性重視のいわゆる「物語」ではありません。童話に分類されることもあります。私たちが一般にイメージする童話とは大きく異なっています。各断章で取り上げられているのは、春、前途、父母、家、土性調査や兵役、古着屋（職）、音や光線、幸福と宗教、蛇や竜、哲学、怒りと火、戦争と殺戮、そして自責と真理など。卒業を控えた作者の期待と不安、希望と諦め、怒りと感謝など、複雑な心の内を覗かせるものとなっています。

例えば、兵役や戦争に関わる部分では、〈戦が始まる、ここから三里の間は生物のかけを失くして進めとの命令がでた。私は剣で沼の中や便所にかくれて手を合わせる老人や女をズブリズブリとさし殺し高く叫び泣きながらかけ足をする。〉という生々しい断章があります。徴兵や侵略といった国家の命には、涙を流しながら突き進む、当時の一青年の引き裂かれる思いが綴られます。

「復活の前」は、作者のなかに鬱屈していた、叫びともいえるような懊悩煩悶がそのまま写しとられたような印象を受けます。その意味では、断片ひとつひとつが作者の文学を形成していく重要な主題でありながら、いまだ昇華されずに存在する、生の声を記した「手記」とも言えます。が、こうした手記が同人誌とはいえ、作者によって同時期に公表された意味は重いと思われま。ちくま文庫解説には、〈その一の思索やイメージは賢治終生のさまざまなモチーフの原形質であり、作者としては混乱していても重要な作品〉（天沢退二郎）とありました。

ちなみに、同人誌『アザリア』は6号まで発行され、賢治は短歌以外では、1号に「旅人のはなし」から、6号に「〔峯や谷は〕」を発表しています。（ベ吉）

（本文の引用は、筑摩書房版『宮沢賢治コレクション3 よだかの星』によりました。）

《3》子どもの本の珠玉のことば 83

また稲妻が走った。
<おまえ、ダブルスできるのか？>
汚れたガラスに、中山が再び書き付けた。
<当たり前だ>
ぼくは馬鹿にされてたまるかという思いで、急いでそう書いた。
ようやく雨足が弱り始めていた。雨はもうすぐ上がろうとしている。
流れ去る雨雲の動きを中山は帽子のつばを握ったまま見上げた。そして、振り返りもせず軒下から駆け出した。
中山の背中が雨水だらけの通路を抜け、建物の陰に消えていった。
<明日>
いつの間に書き付けたのか、窓ガラスの端にあいつの文字が残っていた。

（『熱風』 福田隆浩/著 講談社 2008年2月 p.81-82）

対談で紹介した福田隆浩の18年前の作品『熱風』からの引用です。中2の孝

司は、聾学校に通うと同時に、誰でも参加できる桜庭テニス会に入ってテニスに夢中。造船所近くの崩れかけた廃工場内のテニス用の壁打ちコートでも練習しています。ある日、桜庭テニス会に同じ中2で、不愛想な中山が入ってきます。二人は試合をし、孝司は負けて悔しい思いをします。

そのあと、孝司は、市営庭球場で行われた中山の試合を見に行きます。中山は、元の所属先であるトライテニスの戸田と試合をしますが、あと一步で勝てるというときに、帽子が脱げてしまい、難治性皮膚疾患・汎発型円形脱毛症があらわになり、そのことに動揺したことで、戸田に負けてしまいます。

桜庭テニス会の安田コーチは、孝司と中山にダブルスで市のテニス杯に出場するように言いますが、最初はどちらも反発します。それから孝司が廃工場内の壁打ちコートへ行って中山と出会い、打ち合っつつかみ合いのけんかになりかけたとき、雷が鳴って大雨が降り始め、二人は崩れかけた倉庫の軒下で窓ガラスに指で文字を書いて会話をします。それが引用の部分です。

この後、二人の距離は縮まりますが、中山がトライテニスに所属する幼馴染の江口とその友だちにいじめられているのを孝司が目撃したあと、中山は練習に来なくなります。そして、最後は、孝司と中山、戸田と江口のペアによるダブルスの手に汗握る試合が描写されます。

この本に初めて出会ったとき、一味違うスポーツ物語だと思ってとても新鮮に感じました。聞こえない孝司と脱毛症の中山がぶつかりあいながら少しずつ友情を築いていく過程に説得力があります。その後も『たぶんみんなは知らないこと』（講談社 2022年5月）など、読み応えのある多くの作品を発表し続けており、障害のある子どもも多く登場しています。（Y）

《4》 行って来ました！

兵庫県立歴史博物館で6月14日まで開催されている特別展「妖怪・幻獣づくし」に行ってきました。日本の妖怪の歴史をたどることができる絵巻、浮世絵、絵画、和本、土器、剥製、人形、双六、カルタ、ミイラなど約180点が展示されていました。

全体の構成は、ツチノコ、狐、天狗、怪鳥、河童などを紹介した「第Ⅰ部 妖怪の自然史」と、神社などに残っている人魚のミイラなどの怪遺物の現物と幻獣出現の記録が展示されている「第Ⅱ部 幻獣見聞録」に分けられ、妖怪が自然とかかわっていかにつくられ、伝えられたかがわかりやすく紹介されていました。

冒頭には、弥生時代の「龍を描いた土器」や、『日本書紀』（1669年）の天狗の説明のページがあり、こんな昔から龍や天狗がいたんだと驚きました。そのあと、キツネや鳥などの動物の剥製と妖怪の絵が並べられており、想像力の発展の軌跡を知ることができます。絵巻など、カラーで細密に描かれている妖怪もあり、実在しているように感じられます。

江戸時代までは、妖怪を信じていたのが、江戸時代になってくると、キャラクター化して楽しむという解説があり、時代によって、妖怪との付き合い方が変化している点も興味深いと思いました。特に、「開運！なんでも鑑定団」でも紹介されたという「筑前化物絵巻」妖怪たちの表情がユーモラスで、「蟹の床の怪物」は、二足歩行で上目づかいの蟹に親しみをいただきました。

妖怪を退治しようとしている絵も多く、怖いものを乗り越えようとする人々の知恵を感じました。同じ意味で、神社などに残されている「件（くだん）」や人魚のミイラなどの展示をみながら、不思議なものを目で見たいという人々の欲求を感じました。

すべての展示に丁寧なキャプションが付けられており、主催者の今なぜ、妖怪か、なぜ、妖怪は語り伝えられてきたのかという問いを考える姿勢が読み取れたことでとても楽しく展示をみることができました。(K)

兵庫県立歴史博物館 <https://rekihaku.pref.hyogo.lg.jp/>

《5》 宮川健郎 私の出会った児童文学者たち 第30回

第6章 鳥越信先生

その2 児童文学研究のデザイン（下）

1979（昭和54）年11月、鳥越信先生（1929～2013年）が監修した児童文学史展のお手伝いで、鳥越先生といっしょに沖縄に行きました。私は、1年浪人して入学した大学院の1年次で、24歳でした。

この連載では、「思い出話」を語るだけではなく、私の出会った児童文学作家や評論家の仕事に対する考察や、さらには、そこから、現代児童文学史のとらえ直しも試みます。ご愛読ください。

<本編はこちらから>

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/watashinodeatta.html

《6》 富安陽子 IICLO ストーリーコンペ 第3回

第3回「富安陽子 IICLO ストーリーコンペ」を開催します。

2つのキーワードを使った童話作品を募集します。400字詰め原稿用紙5～10枚で、未発表作品に限ります。

◎第3回のキーワード…「トビウオ」「くつ下」

募集期間：5月20日（水）～7月31日（金）

富安理事長がおもしろい作品5～6点を選び、8月20日（木）のメールマガジンN0.192で発表。その後、読者にいちばんおもしろいと思った作品に投票していただき、1位と2位を決定します。

<詳細、応募方法はこちらをご覧ください>

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/storycompe.html

■ ----- ■
【3】全国のイベント紹介

● 「生誕130年 吉屋信子展 シスターフッドの源流」

場所：県立神奈川近代文学館

会期：開催中～5月31日（日） ※月曜休館、有料

主催：県立神奈川近代文学館、（公財）神奈川文学振興会

上記イベントの詳細およびその他の講座・講演会、展示会、公募情報については、こちらからご覧ください。↓ ↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/04_other/index.html

※イベント情報をお送りください。当財団HPに掲載させていただきます／

■ ----- ■
【4】プレゼント
■ ----- ■

今号のコラム《1》「この本読んだ？」で紹介しました『マユ12歳、鍛冶屋でくらしています。』をプレゼントします。ご希望の方は、プレゼント応募フォームから、(1)お名前 (2)郵便番号・住所 (3)電話番号 (4)メールアドレス、よろしければ (5)このメルマガのご感想をお書きのうえ ご応募ください。

応募フォーム⇒ <https://forms.gle/uL2TpNhMEYWJpnQ9A>

締切は6月10日(水)、当選発表は発送をもって代えさせていただきます／

編 | 集 | 長 | の | つ | ぶ | や | き |
— | — | — | — | — | — | — | — | — |

ゴールデンウィーク明け、夕刻に帰宅したらポストに不在票。改めて翌日届いた息子からのカーネーションは、少ししおれかけていました。送り主の気持ちがいれしくて、つぼみを残して枯れた花を取り除き、蘇生にチャレンジしているところです。(TA)

みなさまのご意見・ご感想をお聞かせください。下記メールアドレスまでお願いいたします。

原則として返信はいたしませんのでご了承ください。

●このメールマガジンは、ご登録いただきました皆様に配信しています。

●配信の登録・解除・変更は、

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/index.html

●このメールの送信アドレスは配信専用です。

●記事の無断転載はご遠慮ください。

発行：一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団 <http://www.iiclo.or.jp/>
〒577-0011 大阪府東大阪市荒本北 1-2-1 大阪府立中央図書館内
TEL：06-6744-0581 FAX：06-6744-0582 E-mail：office@iiclo.or.jp
